

浦海末 広海

Hiromi Sueura

櫻

春

空

講談社
文庫





講談社文庫

常州大学图书馆
藏 官 章
書 搜

末浦広海

講談社

| 著者 | 末浦広海 1964年兵庫県生まれ。関西学院大学経済学部卒業。
2008年『訣別の森』（講談社文庫）で第54回江戸川乱歩賞を受賞。本作は
乱歩賞受賞後第一作として講談社より刊行された。著書には他に、『白
き失踪者』（講談社）、『檻の中の鼓動』『刻命』（ともに中央公論新社）が
ある。

そう さ かん
捜査官

すえうらひろ み
末浦広海

© Hiromi Sueura 2012

2012年10月16日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——凸版印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277395-9

捜査官／目次

第一章	磁場	7
第二章	融合	56
第三章	臨界	98
第四章	共鳴	146
第五章	照射	193
第六章	崩壊	231
エピソード		299
解説	村上貴史	308



講談社文庫

捜査官

末浦広海

講談社

捜査官／目次

第一章	磁場	7
第二章	融合	56
第三章	臨界	98
第四章	共鳴	146
第五章	照射	193
第六章	崩壊	231
エピソード		299
解説	村上貴史	308

搜查官

第一章 磁場

1

ふと視線を感じて顔をめぐらせた。

「さすが、お上手ですね」

となり座る小竹^{こたけとしゆき}俊之が白い歯を見せながら、まわりの捜査員たちに聞こえないぐ
らいの小声で口をうごかした。

杉澤^{すぎさわ}洋二は苦笑をかえして、正面に顔をむけた。

小竹が言っているのは、捜査会議の内容を記録するB5判ノートの片すみに、杉澤
が無意識のうちに描きつけていた落書きのことだった。

ここ南^{みなみ}湊署の二階会議室の最前列にいらんだ長机、いわゆる『雛壇』の中央で、

眉間みけんに皺しわをよせて進行役をつとめる人物の似顔絵だ。

青森県警捜査第一課長・中根芳行なかね よしゆき警視のほそく切れ長な目と、眉間のふかい皺、それにきれいな卵形の輪郭を忠実に写しとったその絵をあらためて眺めると、われながら上出来だと思う。とくに、つよく引きしめられた口許に入れた微妙な陰翳いんえいにより、警視のいらつく様さまをうまく表現できた。

杉澤は、人の顔の特徴をとらえる能力とそれを記憶する能力、そしてそれを描写する能力に長けていた。かつては捜査用の似顔絵を描く担当、『似顔絵捜査官』なるものの真似事をした経験もあるし、その能力を買われて、一時的ではあったが公安部門に在籍していた。

だが、もう二十年以上も昔の話だ――。

被害者の身辺に関する情報しかあつまらない捜査会議に、県警本部からお出ましのお偉いさんがたの表情は一樣にけわしい。三台ならんだ移動式ホワイトボードを背に、雛壇からこちらを睨みつけるようにしている。

雛壇の右端にいる南湊署の橋田恭彦署長はしだ やすひこは、苦悩にみちた表情で精いっぱい体を縮こまらせていた。

ここ何年も凶悪犯罪など起きたことのない田舎町いなかまちに降ってわいた大事件なのだから

ら、その心情も理解できる。来年の定年まで何事もなく過ぎてほしい、というのが署長の口癖だ。

ただでさえ、青森県で開催される『原子力ルネッサンス国際会議』まで半月を切り、県警内ではぴりぴりとした厳戒ムードがただよっているのだ。その影響でこの田舎町の所轄署もあわただしい日々がつづいていた。

しかも、南湊町の滝口義久町長が突如として行なった会見が大きな波紋を巻き起こし、町中が騒然としているなかでの殺人事件発生なのだから、署長が頭を抱えたくないのも無理はない。

「これで会議を終わるが、気合を入れなおして、明日の捜査にあたってくれ」
中根警視の言葉で捜査会議が終わったときには、午後十時をまわっていた。
お偉いさんがたが退室すると、会議室に張りつめていた空気がゆるんだ。

部屋に残るのは、特別捜査本部の中軸となる県警本部刑事部の捜査第一課第三係の捜査員と鑑識課員、ここ南湊署の捜査員、そして応援に駆けつけた近隣所轄の捜査員や機動捜査隊員であり、すべて現場の人間ばかりだ。

ところどころから湧きあがるざわめきのなか、杉澤は手元の捜査資料をかたづけ、眼鏡をケースにしまってから腰をあげた。

「少しやっていきましようよ」

紙コップと五合瓶、ちよつとしたツマミをのせた盆を手に、小竹が声ははずませ誘つてきた。署の武道場に泊まりこんでいる本部捜査員たちが、反省会と称して寝酒がわりに一杯ひっかけるのにつき合おうとの魂胆らしい。

刑事を拝命してからまだ間もない小竹は、特別捜査本部設置がうれしくて仕方ない様子だった。学べることはすべて学ぼうとの貪欲どんよくさが見てとれる。犯人逮捕から階級をあげて本部刑事部へ、などと夢想しているかもしれない。

その気持ちなら理解できる。杉澤にしても、若いころには大きな事件が発生すれば気分も高揚し、手柄をものにしたいとの功名心めいた思いも強くあつた。

だが今ではそんな挑戦的な野心などなくなり、万年警部補のまま安息な平和がつづくのを願うばかりになっている自分がいた――。

「ああ、つき合おうか」

杉澤は小竹の誘いにのり、室内にいくつかできた島のひとつにくわわつた。

アルコールを欲しているわけではない。握り飯のひとつでも空きつ腹に入れておこうと思ったからだ。一人住まいのアパートにもどつても、すぐ口にできる買いおきがなかった。青森県の下北半島の付け根、陸奥湾むつわんに面する南湊町に、終夜営業のコンビニ

ニエンス・ストアは少なく、帰宅途中に遠回りするのも面倒だ。

「どうぞ」

小竹が五合瓶をつかみ上げて、こちらに注ぎ口をむけてきた。

「いや、いい」

杉澤は首を横にふって、みずから紙コップにウーロン茶をそそぎ、おにぎりの一つを手にした。顔を遠ざけて焦点距離をかせぎ、目を細めてセロファンのつまみ口をさがすが、なかなか見つからない。だが、鞆から眼鏡を取りだすのも面倒だった。

「ぬすまれた物が何もないとなると、やはり怨恨えんこんですかね」

紙コップを手にながら小竹が、話のつかかりを作った。

捜査会議で、殺人事件の発生した下平剛三しもひらこうぞうの自宅から奪われたものがなかったとの報告がなされた。杉澤が臨場して見たかぎりにおいても、物色された痕跡はなかった。テーブルに置かれた財布にも現金が残っており、一見したところ物盗りの犯行ではないように思われる。

隠居しているとはいえ、下平夫妻は地元でも有名な資産家である。金目かねめの物がなくなっている可能性もあるために、青森市内で事業をついだ三人の息子たちに今日丸一日かけて確認をさせた。だが、紛失している物はないようだと回答を得た。

「まあ、普通に考えるとそうなるんだろうが」

小竹とペアを組んでいる、県警本部の強行犯第三係の米村真澄警部よねむらま すみが言った。

三十代後半の米村警部は何かと面倒見がよく気さくな性格らしく、たった一日で小竹もすっかりなつき、まるで親分のように慕っている。

この米村警部の顔の特徴としては、頬骨から顎にかけての輪郭ががっちりしていて、大きく柔和にゆうわな目と、中央部が盛りあがった鼻があげられる。経験上この顔の主は、エネルギーシユな活力をそなえており、活発な活動を見せることが多い。まさに親分肌の気質なのだろう。

「商売のほうでは、なにかと良からぬ噂が出ていたようですから」

「昔はかなりのやり手だったみたいだな。だが、最近では、なかなかの好人物だと近所でも評判はいいらしいじゃないか。怨恨とも決めつけられんなあ」

米村警部がそう返すと、小竹は神妙そうな表情で何度かうなずいた。

殺害された下平剛三と芳江よしえは、県内では有数の土木建築業である下平建設の設立者であつた。

四十年以上も前に二人して会社を立ちあげ、準ゼネコンと呼ばれるまでの規模にそだててきた。地元選出の代議士や県会議員などへの積極的な献金も行なつてきてお

り、県内の大型公共事業にはかならず名前をつらねている。

とくに、六ヶ所村ろくしょや東通村ひがしどおりなどでの原子力関連施設の建設工事で飛躍的な成長を遂げたのだが、土地の買収や住民の立ちのきなどの揉め事の際には、暴力団関係者に依頼するなどかなり強引な手口を使つたとの報告があつた。

「二日たつて何も確証が出ないのですから、これは長引きそうですね」

「いや、一刻も早くホシをあげなきゃ、被害者が浮かばれんぞ」

米村警部の言葉に、小竹が唇を引きしめ大きくうなずいた。

二人のやり取りを聞きながら、杉澤は昨日の下平夫妻の死体発見から、その後の捜査内容に思いをめぐらせた――。

南湊消防本部から青森県警察本部の通信司令室に一報がとどいたのは、平成二十一年九月四日、午前七時十一分だった。

救急車出動の要請にしたがい、JR南湊駅にほど近い下平剛三の自宅へと救急隊員が駆けつけたところ、下平剛三とその妻芳江の死体を確認したという。他殺のように見えるとの隊員の報告を受け、消防本部から県警へと緊急要請がなされた。

現場に到着した杉澤は、野次馬たちの顔をできるだけ記憶にとどめるように努め